



Title	0. S. レベチエヴァとA. アガエフのムスリム女性解放論 : ロシア帝国から発信されたイスラーム的男女平等論
Author(s)	帯谷, 知可; OBIYA, Chika
Citation	日本中央アジア学会報, 17, 40-41
Issue Date	2021-07-31
DOI	<a href="https://doi.org/10.14943/jacas.17.40">https://doi.org/10.14943/jacas.17.40</a>
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/89138">https://hdl.handle.net/2115/89138</a>
Type	journal article
File Information	JB017_010obiya.pdf



## O.S.レベヂェヴァとA.アガエフのムスリム女性解放論 —— ロシア帝国から発信されたイスラーム的男女平等論<sup>(1)</sup> ——

帯谷 知可

19世紀末から20世紀初頭の中央ユーラシアにおけるムスリム女性解放論のありようを俯瞰する一助とすべく、本報告はこの時期に相次いでロシア帝国領内でロシア語で刊行され、ムスリム女性の解放を訴えた2つの著作、すなわちカザン出身のロシア人女性翻訳家・東洋学者オリガ・レベヂェヴァ Ольга Сергеевна Лебедева (1854-?) の『ムスリム女性の解放について』[Лебедева 1900]、およびアゼルバイジャン出身のジャーナリスト、アフメドベク・アガエフ Ахмед-бек Агаев (1869-1939) の『イスラームによる、そしてイスラームにおける女性』[Агаев 1901] に焦点を当てた。両著作の骨子を紹介しつつ、彼らが何を参照してムスリム女性解放論を構成したのかに着目し、国境を越えたムスリム女性解放論の共振・共鳴関係の一端を明らかにすることを目的とした。

レベヂェヴァとアガエフの間の交流関係は不明だが、ともに裕福な貴族の出で、ロシア・ヨーロッパ式の教育を受けた上に東洋学の訓練を積んでいた、母語以外に複数のヨーロッパ諸語・東洋諸語に通じていた、後半生においてトルコと密接な関係を持ったなど、出自や経歴からくる共通点が認められる。そしてムスリム女性の解放を訴えるにあたって、当時のムスリム女性をめぐる状況を極めて悲惨なものと認識しつつ、イスラームは初期の教えに立ち戻れば女性を尊重し男女平等を保障しているので、「誤ったイスラーム理解」や「野蛮な慣習」(一夫多妻、女性の隔離・ヴェール着用など)を正せば、イスラームの信仰を維持したまま近代化は可能だと主張し、それをクルアーンとハディース、および多様な学術文献に依拠して、イスラーム史上の傑出した女性を列挙することにより立証しようとした点で共通している。結論として、レベヂェヴァはムスリム女性解放のためには東洋学協会を各地に設置して西洋と東洋の融合を促す必要があると、アガエフは近代化改革はムスリム自身の手でなし遂げねばならず、そのために文字改革と女性解放が喫緊の課題だと訴えた。また、両者とも、

(1) 本報告は次の拙稿に基づいたものである。

帯谷知可「ロシア帝国からムスリム女性の解放を訴える——O.S.レベヂェヴァとA.アガエフのイスラーム的男女平等論——」『史林』104(1)、2021年、113-154頁。

当時のロシアやヨーロッパにおけるイスラーム世界に対する植民地主義的「偏見」への異議申し立てを視野に入れていたことも読み取れる。

両著作で言及される人名・文献名を網羅してみると、イスラーム史上の傑出した女性44件、おおむね19世紀に活動した学者・著述家等31件、その他の歴史的人物56件、文献37件を得た。ヨーロッパにおけるイスラーム学・東洋学の動向、ムスリム世界における女子教育や女性による言論の拡大といった同時代情勢について広く目配りされている一方で、ロシアにおける(ロシア人)女性解放の思想的支柱となったとされるロシア知識人の著作には特に言及が見られない。

言及された同時代人のうち、イスラーム的男女平等論の国境を越えた共振という観点から重要な人物として、エジプトの改革主義者で、『女性の解放』(1899)、『新しい女性』(1900)を著したカーシム・アミン Qasim Amin (1863-1908)、トルコ人初の女性作家で、「イスラームの女性」(1891)、「名高きムスリム女性」(1899)を著したファトマ・アリエ Fatma Aliye Topuz (1862-1936)、そして英領インドの改革主義者・歴史家で、『イスラームの精神』(1891)、『サラセン抄史』(1899)などのイスラーム通史で知られるサイイド・アミール・アリー Syed Ameer Ali (1849-1928)に着目した。レバジェヴァは著作中でアミンの『女性の解放』に強い賛同を示している。また、オスマン帝国の言論界の重鎮アフメト・ミドハト Ahmet Mithat Efendi (1844-1912)を通じてファトマ・アリエと直接の知己があり、「イスラームの女性」を仏語とアラビア語に翻訳した経緯があった。アガエフは女性用の仕切りや覆いがその起源においては女性を抑圧する性質のものではなかったことを説明するのにファトマ・アリエの「名高きムスリム女性」に依拠した。特筆すべきは、両者によるサイイド・アミール・アリーの参照で、イスラーム史上の傑出した女性を描くにあたって、レバジェヴァは『サラセン抄史』から、アガエフは「イスラームにおける女性の影響」(1899)から、テキストをそのまま引き写すかのように大量の翻訳・引用を行っていることが明らかとなった。

このようなイスラーム的男女平等論は、今日のジェンダー研究等の視点から見れば批判されうる要素を多分に含むものではあるが、当時、ヨーロッパ的な高等教育を受け、イスラーム学や東洋学の成果に触れることができ、ムスリムであるかないしはムスリム世界に大きな共感を寄せた人々が身を寄せる「大きな傘」のように存在していた可能性を示唆した。

## 参考文献

- Агаев, Ахмед-бек. 1901. *Женщина по исламу и в исламе*. Тифлис.  
 Лебедева, Ольга С. 1900. *Об эмансипации мусульманской женщины*. Санкт-Петербург.

(京都大学東南アジア地域研究研究所)